

家庭学習応援教材

中古の歌物語 『伊勢物語』を読む

神戸学院大学 法学部・経済学部・経営学部・人文学部・栄養学部・総合リハビリテーション学部
2013 過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章は、『伊勢物語』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

むかし、紀の有常ありつねといふ人ありけり。三代のみかどつかに仕うまつりて、時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは、心うつくしく、あてはかなること好みて、こと人にもにず。貧しく経ても、なほ、むかしよかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。年ごろあひ馴なれたる妻、やうやう床とこはなれて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたる所へゆくを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくを、いとあはれと思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり。思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう、いまはとてまかるを、なにごともいささかななることもえせで、つかはすこと」と書いて、奥に、手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつつ四つは経にけり

かの友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、夜の物までおくりてよめる。
年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君をたのみ来ぬらむ
かくいひやりたりければ、

これやこのあまの羽衣むべしこそ君がみけしまとたてまつりければ
よろこびにたへで、また、

秋やくるつゆやまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

注1 紀の有常………きのなとら紀名虎の子で、娘は在原業平の妻。生年不詳一八七七年。

注2 三代のみかど………にんみょう仁明・文徳・清和の三代の天皇のこと。

注3 みけし………お召し物のこと。

問 この文章の内容に合致するものを、次のA～Eの中から一つ選べ。

A 貧しくなつてからも、世の中のことを知ろうともしない男を、妻は情けないことと嘆いて歌を詠み、友人におくった。

B 時流にのれず貧しい生活を余儀なくされた男が、妻の死を目前にして二人が過こした年月をしのんでいる。

C 男は妻に、共に暮らした日々を数えると十四年にもなつていたという歌をおくり、その返歌を受け取った。

D 男は長年一緒に暮らした妻が、貧しさを理由に家を出て行ったことに怒りを覚え、その嘆きを歌にして友人におくった。

E 男は妻に何もしてやれないことを悩み友人に歌をおくると、友人から歌とともに、夜具の類までおくられてきて感激した。

【解説】

◇本文の構成

前半部（和歌にまつわるエピソード）

紀の有常という人物の紹介

← 三代の帝に仕えた頃は豊かだったが、時代が変わり今は貧しい。

有常の妻の出家

← 長年馴れ親しんだ妻が、夫婦関係が途絶えたことで出家を決意。

有常の嘆き

← ・夫婦として過ごした長い月日を思うと、しみじみとしさがつのってくる。

・せめて別れ際に妻に何かしてやりたいが、貧乏なので何もしてやれない。

後半部（和歌のやりとり）

有常から友人に

← 「手を折りてあひ見しことを…」

← （出家する妻に何もしてやれないつらさを嘆く歌）

友人から有常に

← 「年だにも十とて四つは…」

← （和歌と一緒に夜具をおくる）

有常から友人に

← 「これやこのあまの羽衣…」

← （おくられた夜具に対するお礼の歌）

有常から友人に

← 「秋やくるつゆやまがふと…」

← （うれしさをやや誇張して、もう一度礼を伝えた歌）

【現代語訳】

昔、紀の有常という人がいた。三代の帝にお仕え申し上げて、時勢に乗って栄えたが、（その）のちには帝が変わり時勢が移り変わってしまったので、世間並みのよう（な暮らし向き）ではなかった。人柄は、心が立派で、上品で優雅なことを好んでいて、他の人とは違っている。貧しく暮らしているも、依然として、昔（暮らし向きが）よかった時の心のままで、世間並みの（世渡り上手に暮らす）ことを知らずにいた。長年お互いに馴れ親しんだ妻が、だんだん夫婦関係が途絶えて、ついに尼になつて、（妻の）姉が先に出家した所へゆくのを、夫は、（その妻と）本当に心から仲よくしたことはなかったけれど、これで（お別れます）と（別れて）いくのを、たいそうしみじみといとしく思うけれど、貧しいので（妻に）してやる（＝尼の衣をおくる）すべもなかった。思い悩んで、仲よく互い

に語り合った友だちの所へ、「これこれで、(妻が)これだと(尼になって)去って行くのに、(妻のため)何事もほんの少しのこともできないで、(妻を)送り出すのですよ」と書いて、(手紙の)奥に、指を折って妻と夫婦の契りを交わした年月を数えてみると、十数えてはそれを四回繰り返し返して四十年も過ぎてしまったのだなあ

その友だちはこれを見て、たいそうしみじみと気の毒に思っ、夜具までおくって詠んだ(歌)。年でさえも十数えて四回、四十年も過ぎてしまったくらいなのに、ましてどれほどあなたの奥方はあなたを頼りにして来たことでしょうか。このように詠んで(手紙を)おくったところ、

尼になる妻にくださった、これは天の羽衣ですね。なるほどあなたがお召し物としてお召しになったすばらしいものです

喜びに耐えかねて、また、

秋が来たのだろうか。露が置いていると見まぢがえるほど袖が濡れているのは、私のうれし涙が降るのでしたよ

【解答】

E

A 「妻は(男を)情けないことと嘆いて」にあたる記述は本文中にはない。また、「(妻は)歌を詠み、友人におくった」とあるが、歌を詠んで友人におくったのは妻ではなく夫である。

B 「妻の死を目前にして」とあるのが×。正しくは「妻の出家を目前にして」。

C 「男は妻に(歌をおくり)」「十四年」が×。正しくは「男は友に」「四十年」。

D 「貧しさを理由に」とあるのが×。正しくは「だんだん夫婦関係が途絶えたことを理由に」。また、「(男は)怒りを覚え」にあたる記述は本文中にはない。

E 本文の内容どおり。

【作品(作者)解説】

作者未詳。詳しい成立年代も不明(およそ九〇〇年代中頃の成立と推定される)。現存最古の歌物語。約百二十五段の、和歌を中心においた短編から成る。主人公は在原業平がモデルと伝えられ、業平及びその周辺人物の恋物語や友情にまつわるエピソードが語られる。それぞれの短編に相関がみられ、業平の初冠(元服)から辞世までを描いた一代記として構成される。本文の主人公は業平の岳父であるが、当時の夫婦関係のあり方がうかがいしれる挿話となっている。